

令和8年 5月 24日

松阪市議会議長 濱口高志 様

小川朋子

## 視察研修報告書

### 子どもまんなかフォーラム～in 関西～

食・農・環境・教育の連携により、子どもの健やかな成長へ

日時:令和8年5月24日(日)

場所:大和大学(大阪府吹田市片山町2丁目5-1)

主催者:子どもまんなかみらい共創プロジェクト(代表:山下)

登壇者:

#### 特別講演① “健康と環境を守るものづくり”

シャボン玉石けん株式会社 取締役 松永 康志 氏

#### 特別講演② “お米の力で未来を変える”

東洋ライス株式会社 常務執行役員 関 博行 氏

#### 特別講演③ “食から始まる健康都市づくり”

大阪府泉大津市長 南出 賢一 氏

#### 特別講演④ “子どもの想いを社会へ届ける”

一般社団法人こどもミュージアムプロジェクト 事務理事 後藤 昌代 氏

#### 特別講演⑤ “子どもが未来を信じられる社会へ”

子どもは未来 代表 櫛辺 悠介 氏

#### 特別講演⑥ “食と農で未来を育てる”

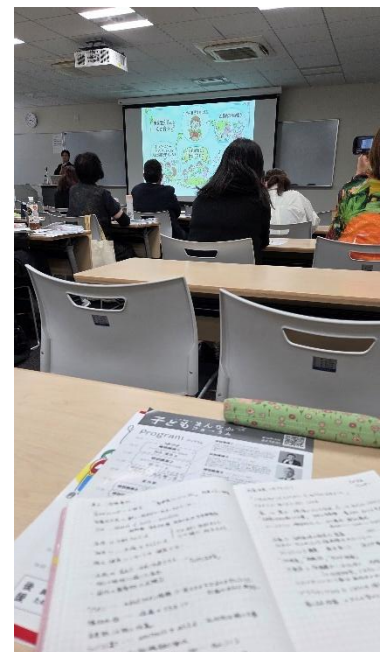
株式会社アグリーンハート 代表取締役 佐藤 拓郎 氏

#### 特別講演⑦ “一人ひとりに合った健康革命”

東京科学大学 准教授 安達 貴弘 氏

#### 特別講演⑧ “食・環境・教育をつなぐ実践”

株式会社ギフトッド 代表取締役 前島 由美 氏



### はじめに

今回参加した「子どもまんなかフォーラム」では、「食」「農業」「教育」「健康」「環境」を、それぞれ別々の課題としてではなく、“子どもたちの未来”という視点で一体的に考える講演が行われた。

どの講演にも共通していたのは、

- 子どもの健康は毎日の食と暮らしから作られること
- 農業や地域環境が子どもの未来につながっていること
- 子どもの問題を福祉や教育だけで完結させないこと
- 地域全体で支える循環を取り戻す必要があること であった。

松阪市においても、

- 学校給食
- 地産地消
- 有機農業
- 不登校支援
- 廃校活用
- 子どもの居場所づくり
- 健康づくり など、それぞれの分野で個別の施策は進められているが、分野横断的な連携や、

「子どもを真ん中に置いた地域循環」という視点については、まだ発展の余地があると感じた。

以下、各講演の内容と、松阪市における課題・可能性について報告する。

### ① シャボン玉石けん株式会社 松永康志氏 「健康と環境を守るものづくり」

シャボン玉石けんは、もともと合成洗剤を販売していたが、人体や環境への影響を知ったことをきっかけに、1974年に無添加石けんへ大きく方針転換した企業である。

その結果、売上や従業員数が激減し、17年間にわたり厳しい経営が続いたが、「体に悪いと分かったものは売らない」という理念を貫いてきた。

講演では、

- 石けんは天然油脂から作られ、微生物によって分解されやすいこと
- 合成洗剤は分解に時間がかかり、水環境への影響が懸念されること
- 香料や柔軟剤による“香害”や化学物質過敏症に苦しむ人が存在すること
- 消火剤に含まれている合成化学物質で消化後の土壌や河川への汚染が懸念されること

などの説明があった。

また、能登半島地震での支援活動や、漁業地域での石けん利用の実証実験も紹介され、家庭から流れる排水が海や川へつながっていることを意識する必要性が語られた。

#### ➡松阪市における課題

松阪市は海・川・山を有する自然豊かな地域であり、環境保全は重要なテーマである。

一方で、

- 香害や化学物質過敏症への認知
- 学校や公共施設での柔軟剤・香料への配慮
- 水環境と生活排水の関係

などについて、市民全体で考える機会はまだまだ多くない。

また、松名瀬海岸など沿岸環境保全に取り組む中でも、

家庭排水と海洋環境の関係について啓発を進める余地があると感じた。



### ② 東洋ライス株式会社 関博行氏 「お米の力で未来を変える」

東洋ライスは、独自の精米技術によって「金芽米」の精米技術を開発している企業である。

金芽米は、白米の食べやすさを残しながら、玄米に近い栄養とうま味を保持していることが特徴である。

講演では、

- 白米は食べやすい一方で、栄養部分まで削られていること

- 玄米は栄養が豊富だが、食べにくさがあること
- 金芽米は“食べやすさ”と“栄養”を両立していること などの説明があった。

また、

- 精米技術の変化と食生活の変化
- 健康づくりと医療費抑制
- 社員食堂での導入事例
- 学校給食や妊婦支援への導入事例 など紹介された。

さらに、

- 地元米の消費拡大
- 農家支援
- 耕作放棄地対策
- 地域ブランド化 など、地域循環につながる可能性についても語られた。



### ➡松阪市における課題

松阪市は農業地域でありながら、学校給食と地域農業の連携は十分とは言えない。

現在も「ちゃちゃもランチ」など地産地消の取り組みは行われているが、

- 地元産米の戦略的活用
- 給食を通じた健康政策
- 食と医療費の関係
- 農家支援と給食政策の連動

などについては、今後さらに研究・検討の余地がある。

また、給食無償化議論だけでなく、「何を食べるか」という視点も重要であると改めて感じた。

### ③大阪府泉大津市長 南出賢一氏 「食から始まる健康都市づくり」

南出市長は、「食」を中心に、

- 子どもの健康
- 妊婦支援
- 農業振興
- 地域循環 を一体的に進める取り組みを紹介された。

泉大津市では、有機栽培や特別栽培米を行う農家と直接連携し、市が安定して買い取る仕組みを構築している。

また、「マタニティ応援プロジェクト」として、妊婦へ毎月 10kg の金芽米を配布しており、

- 便秘
- 肌荒れ
- 胃の不調 などの改善や、
- 出生時体重
- 生後 1 か月時点での体重変化 などのデータも紹介された。

学校給食では、

- 有機米
- 発酵食品

- 地産地消
- 行事食 を積極的に取り入れているとのことであった。

さらに、生産者と子どもたちが直接交流することで、「ありがとう」が循環する地域づくりを目指している点が印象的であった。

#### ➡松阪市における課題

松阪市は農業地域でありながら、

- 地域農業
- 給食
- 健康政策
- 妊婦支援 が分断されている部分がある。

特に、

- 地元農産物をどう地域循環につなげるか
- 給食を健康政策として位置づけるか
- 妊婦支援と食をどう結びつけるか などは、今後の研究課題である。

また、農家と子どもたちが直接つながる機会についても、更なる充実の余地があると感じた。



#### ④子どもは未来 代表 榎辺悠介氏「子どもが未来を信じられる社会へ」

榎辺氏は、高校教員時代に、学校や支援機関の外側で孤立している子どもたちと向き合った経験から、「子どもは未来」を立ち上げた。

現在は、

- 冒険教育
- 学校内フリースクール
- 子ども食堂
- 職業体験
- 親子コミュニティ など、多面的な活動を展開している。

また、廃校を活用した、

- 居場所づくり
- フリースクール
- 地域交流 を一体化する「廃校再生プロジェクト」についても紹介があった。

#### ➡松阪市における課題

松阪市でも不登校支援や居場所づくりは行われているが、

- 教育
- 福祉
- 地域
- 民間活動 の連携は、まだ十分とは言えない。

また、市内でも閉校施設の活用が課題となっている中、

- 子どもの居場所
- 地域交流
- 学び直し



- 多世代交流 などを組み合わせた活用方法については、研究の余地があると感じた。

### ⑤株式会社アグリーンハート 代表取締役 佐藤拓郎氏 「食と農で未来を育てる」

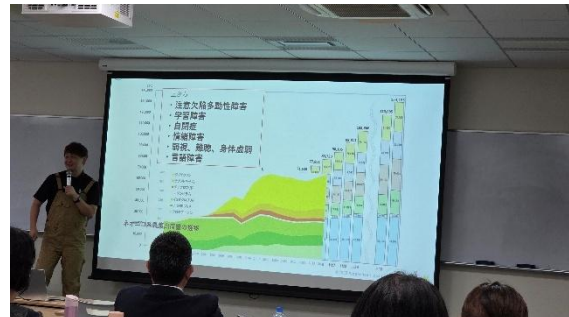
佐藤氏は、家業の破綻や過労による経験を経て、農業法人「アグリーンハート」を設立した。

現在は、

- 有機農業
- 学校給食への有機米提供
- 障がい者就労支援
- 農業教育 などを行っている。

講演では、

- 農薬や化学肥料への依存
- ネオニコチノイド系農薬
- 土壌環境
- 腸内環境と健康 などについて説明があった。



また、

- 遅まき
- 密植
- 紙マルチ などを活用し、農薬や除草剤に頼らない農業技術についても紹介された。

#### ➡松阪市における課題

松阪市は農業地域である一方、

- 高齢化
- 後継者不足
- 耕作放棄地 などの課題を抱えている。

また、有機農業についても、個々の取り組みはあるものの、市全体としての方向性はまだ模索段階である。

給食や健康政策、福祉、農業を横断的につなげる視点について、今後研究が必要であると感じた。

### ⑥東京科学大学 准教授 安達貴弘氏 「食から未来の健康社会をつくる」

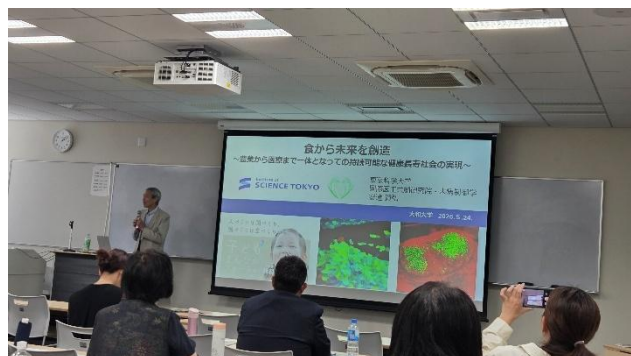
安達氏は、健康は医療だけではなく、「農業・食・環境・地域」が繋がって初めて守られると説明された。

特に「腸の健康」の重要性について、

- 腸と免疫
- 神経
- ホルモン
- 腸内細菌 との関係が説明された。

また、

- 腸内環境の乱れ
- アレルギー
- 糖尿病
- 認知症 などとの関連についても触れられた。



さらに、

- 白米
- 玄米
- 金芽米
- 発酵食品

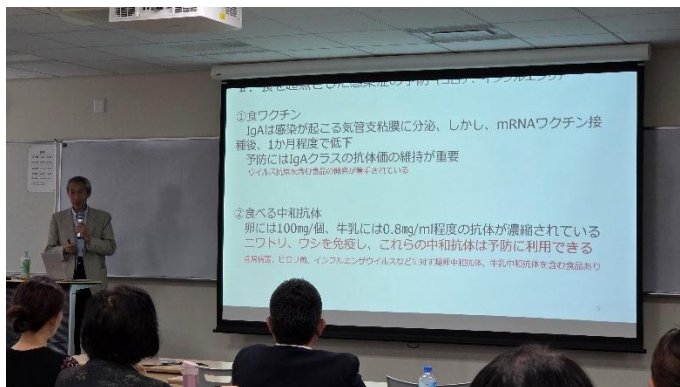
などの違いについても説明があった。

### ➡松阪市における課題

松阪市でも健康づくり施策は行われているが、

- 医療
- 食
- 農業
- 学校給食 を一体で考える視点はまだ弱い。

また、予防医療や未病対策についても、食生活改善との連携を強める余地があると感じた。



### ⑦株式会社ギフトテッド 代表取締役 前島由美氏 「食・環境・教育をつなぐ実践」

前島氏は、発達障害や不登校の子どもたちについて、

- 感覚過敏
- 栄養不足
- 腸内環境
- 化学物質
- 生活環境 などが関係している可能性について語られた。

現在は、

- 自然素材を使った施設
- 農業体験
- 発酵
- 昔ながらの暮らし

を取り入れた活動を行っている。

また、

- 玄米
- 金芽米
- 味噌
- 甘酒
- 発酵食品 などによる食改善についても紹介があった。



### ➡松阪市における課題

松阪市でも不登校や発達支援は重要課題となっている。一方で、

- 教育
- 福祉
- 食
- 環境 を一体で考える取り組みはまだ少ない。

また、農業体験や自然体験を含めた支援についても、地域資源を活かした展開の可能性があると感じた。

## 総括所感

今回のフォーラムでは、「食」「農業」「教育」「健康」「環境」を、それぞれ単独の問題としてではなく、すべてが相互につながっているものとして捉える視点が一貫していた。

特に印象的だったのは、各講師が示した内容が、単なる理念や感覚論ではなく、実際のデータや現場での事例とともに説明されていたことである。

妊婦支援と出生時体重の変化、給食改善による食べ残しの減少、発酵食品や食改善による子どもたちの変化、腸内環境と健康との関係など、様々な実例が示されており、決して憶測や想像の話ではなく、現実に行っている事実として受け止める必要があると感じた。

また、多くの講演に共通していたのは、現在問題視されている健康課題や環境問題、不登校や発達支援の増加などが、戦後の急激な生活様式の変化や、大量生産・大量消費型社会の発展と共に増えてきたという視点であった。

便利さや効率化を追い求める中で、

- 食
- 農業
- 地域コミュニティ
- 自然環境
- 人とのつながり が分断されてきた結果として、

現在の様々な社会課題が生まれているのではないかという問題提起でもあった。

また、近年増加している山火事や、歴史的価値のある神社仏閣の火災についても考えさせられた。

消火活動において、どのような消火剤が使用されているのか。もし合成洗剤など化学物質を含むものが大量に使われているのであれば、森林や土壌への影響、さらには自然再生への影響についても検証が必要ではないかと感じた。

この点については、今後さらに調査・研究していきたい。

また、農業一つをとっても、

- 有機農業
- 慣行農業
- 自然栽培
- 特別栽培 など様々な考え方や農法が存在する。

重要なのは、「どれが正しいか」を対立的に考えるのではなく、それぞれの立場や努力を認めた上で、選択肢を持ち、融合しながら地域に合った形を模索していくことではないかと感じた。

子どもたちの未来を守るためには、

- 食
- 教育
- 医療
- 福祉
- 農業
- 環境 を分断せず、地域全体でつなげて考えていく視点が必要である。

松阪市においても、既にある地域資源や取り組みを横断的につなぎ合わせながら、「子ども真ん中」の視点で地域づくりを進めていくことが重要であると感じた。